



電子書籍の動向と図書館の役割

湯浅 俊彦

I. はじめに

2009年9月、ある医科大学の4回生が私に電話をかけてきて、電子書籍の動向について教えてほしいという。聞けば私が委員としてまとめた「電子書籍の流通・利用・保存に関する調査研究¹⁾」をPDFで読んだという。快諾すると約束の日、じつに礼儀正しい青年が私の研究室にやってきた。

なんでもハワイ大学に留学していたときに、図書館では日本のように自席にたくさんの本を積み上げてレポートを書くのではなく、コンピュータ端末で電子書籍を検索し、そのまま本文をごく当たり前に利用していたという。ところが帰国すると日本の大学図書館では電子ジャーナルの利用はできても、医学系の日本語タイトルの電子書籍がない。学部学生としては医学テキストを頻繁に参照する必要があるが、このままでは日本の医科大学生の学習環境は米国と比較してあまりに劣悪すぎて、これからの日本の医療水準を危惧するとさえいうのである。

私は彼に和書の電子書籍が普及しないのは、その発展を阻む2つの要因があるからだと答えた。それは第1に日本の出版社がこれまであまりにも電子書籍のデバイスの問題に目を奪われすぎ、図書館も含めたデジタル環境下における出版コンテンツのさまざまな利活用について認識不足だったこと。第2に出版社から見て図書館市場がこれまであまりに貧弱だったことである。

しかし、その問題に入る前にまず電子書籍の

類型と市場規模について簡単にまとめておこう。

II. 電子書籍の類型と市場規模

1. 電子書籍の類型

電子書籍は一般に、電子出版のうち学術系の電子ジャーナルや一般読者向けのデジタル雑誌を除いたものを指し、以下のような類型がある。

- (1) CD-ROMなどのパッケージ系電子書籍
- (2) 電子技術を利用してディスプレイで読む電子辞書
- (3) 単行本など紙で出版された資料をデジタル化し、オンライン配信で提供されるもの
- (4) 「ケータイ小説」のようにもともとデジタルコンテンツ(ポーン・デジタル)としてオンライン配信で提供されるもの
- (5) 貴重書や郷土資料など図書館の所蔵資料をデジタル化したもの
- (6) 「Yahoo! Japan 辞書」のように検索エンジンに搭載されたもの
- (7) 「JapanKnowledge」「化学書資料館」「NetLibrary」のように出版されたコンテンツを統合的に検索し、閲覧することができるもの

日本における電子出版の歴史は1985年に三修社が「最新科学技術用語辞典」をCD-ROMで出版したところから始まり、電子辞書、さらには「Σ(シグマ)ブック」や「LIBRIé(リブリエ)」といった読書専用端末、ケータイ*1、汎用型デバイスである「iPod touch」、ニンテン

*1 携帯電話は今日では電話以外にインターネット、電子メールなどさまざまな機能を利用することが多いため、メディア論的な呼称としてここでは「ケータイ」と表記する。

ドー「DS」、ソニー「PSP（プレイステーションポータブル）」などさまざまなデバイスが出現し、これまでに何度も今年こそ“電子書籍元年”であると喧伝されてきたのである。

しかし、実際のところ書店店頭に並ぶ新刊書籍がそのまま電子書籍として一般読者に提供されることは今日に至ってもほとんどないのが実態である。

2. 電子書籍の市場規模

また、電子書籍の市場規模については「電子書籍ビジネス調査報告書²⁾」が2002年から集計しており、図1のようになっている。このグラフを見れば電子書籍市場は急速に拡大しているかに見えるが、ここで集計されている電子書籍は実際に電子書籍を販売している10サイト（コンテンツプロバイダー）の売上高であり、また2008年度の464億円のうち402億円はケータイ向け電子書籍、その402億円のケータイ向け電子書籍のうち330億円をコミックが占めているのである。

Ⅲ. 図書館における電子書籍の収集、提供、保存

1. 海外出版社中心の学術系電子書籍

ところが海外の電子書籍は日本とは異なり、ケータイではなくPC向け、コミックではなく学術系の市場として成立していることがわかる。例えば、エルゼビアのフルテキスト・データベース「サイエンス・ダイレクト³⁾」には2,500誌の電子ジャーナルだけでなく、2007年からは電子書籍の提供も開始し、現在は単行本だけで7,000タイトル以上のコンテンツが搭載されている。エルゼビアジャパンによると、電子書籍は1回払いの買い取り制で価格は大学向けの場合、ユーザー数1万人以下であれば冊子体と同じ価格、10,001～25,000人は冊子体の125%、25,000人以上は冊子体の150%という設定になっている。また、企業向けは500人以下で冊子体の200%、501～2,000人で250%、2,001～3,000で300%と対象と組織規模に応じた価格体系となっているのである。

したがって日本の大学図書館や専門図書館で提供されている学術系の電子書籍は海外出版社

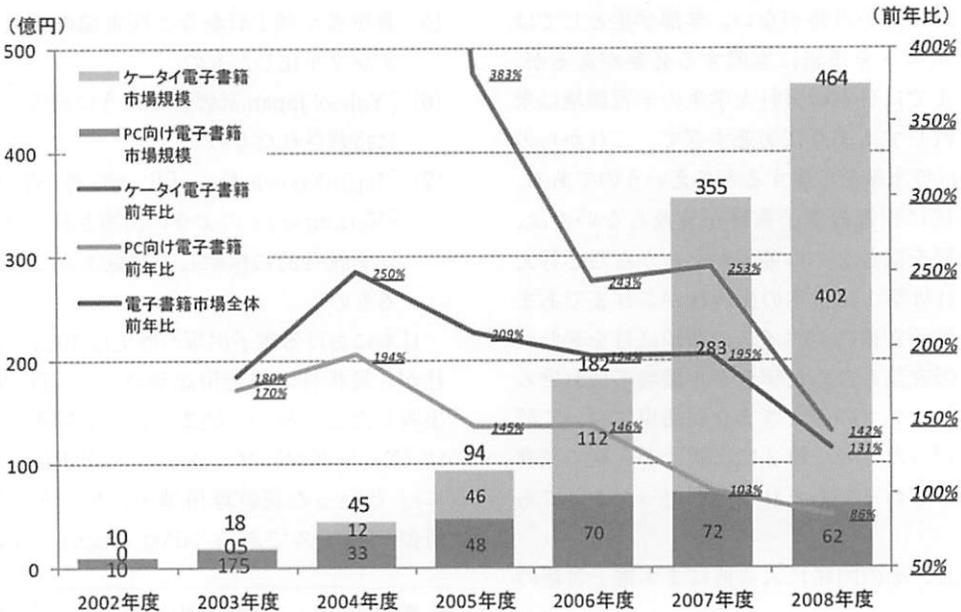


図1 電子書籍ビジネス調査報告書²⁾

のものが中心とならざるをえない。

例えば「京都大学図書館電子リソース⁴⁾」の電子ブック一覧によると、ACM (Association for Computing Machinery) の Proceedings 類 177 タイトル、Cambridge eBooks Collection (Cambridge University Press の電子ブック：ビジネス・経済学・工学・環境・生命科学・言語学・文学・数学・物理学・政治学の各コレクション約 1,800 タイトル) などがあり、医学分野のタイトルは「Books@OVID」が提供する約 150 タイトル、ebrary の約 60 タイトルがある。

一方、和書コンテンツは「日本国語大辞典」「字通」「日本歴史地名体系」「東洋文庫」「週刊エコノミスト」「会社四季報」「日本大百科全書(ニッポニカ)」などの JapanKnowledge と、「現代史資料(みすず書房)」「マウス ラボマニュアル(シュプリンガー・ジャパン)」「物理学 30 講シリーズ(朝倉書店)」など約 500 タイトルの NetLibrary であり、医学分野のタイトルはない。

これは日本における電子書籍市場が、あまりにもコミックや小説作品を中心に構想され、結局のところケータイ向け市場だけが営利的に成り立つという結果をもたらしているからである。

2. 学術系電子書籍における和書コンテンツの展開

このような学術系電子書籍市場における和書コンテンツの不在という事態に対して、最近になっていくつかの試みが始まっている。

前述の NetLibrary はこれまでの 17 万タイトル以上の洋書の電子書籍に加え、2007 年 11 月より和書コンテンツを搭載し、2010 年 1 月現在、51 社約 1,400 タイトルを提供している。紀伊国屋書店によると NetLibrary は、次のような利点がある⁵⁾。

- (1) 紙媒体に近い利用が可能
- (2) 全文横断検索、書籍内全文検索機能により、必要な情報をすばやく見つけることができる
- (3) 付箋をつけるイメージでマーキングできる
- (4) コンテンツサーバーを図書館に確保する必

要がない

- (5) 購入した図書目録を OPAC にロードすることにより、紙媒体と電子媒体を同一プラットフォームから提供できる

まだまだタイトル数は少ないが、今後さまざまな分野が増える可能性は高い。

また、丸善と日本化学会が運営する「化学書資料館⁶⁾」は国内で出版された化学書を統合的に検索し、閲覧することができるサイトである。現在、日本化学会の編集による専門書・便覧・辞典が 147 冊、約 83,300 ページ相当の情報が集められている。

医学分野では、例えば医学書院が医学・看護の電子ジャーナルサイト「MedicalFinder⁷⁾」を 2009 年 1 月から開始している。これは日本の学術出版社にとって初めての本格的なプラットフォーム構築であり、「生体の科学」など 36 タイトルの文献が最大過去 7 年分収録され、利用者はそれらの文献を瞬時に検索し、PDF 形式で閲覧・印刷することができる。法人サービスとパーソナルの 2 種の契約方法があり、契約雑誌以外でもネットで決済すれば全文が閲覧可能である。また予約購読をしていない雑誌の文献は 1 論文あたり 1,050 円(税込)で閲覧することができる。

しかし医学分野の電子書籍となると提供されているコンテンツはきわめて少ない。医学書院のホームページでも電子メディアの刊行状況は「今日の診療⁸⁾」が DVD-ROM 版、イントラネット版、WEB 版で提供され、「2010 年版系統別看護師国家試験問題+保健師国家試験問題」の WEB 法人サービス版なども掲載されているが、タイトル数はごくわずかであることがわかる。

また、大手取次のトーハンが運営する「Medical e-hon⁹⁾」では“あらゆる医療従事者のための電子書籍サイト”とうたっているが、実際には医学関係・看護関係・コメディカル関係などの雑誌を中心に記事単位・論文単位に分割し、主に電子書籍として配信を行っているの

である。

3. 電子書籍と図書館の役割

日本では出版社といえば独立系出版社がほとんどで、欧米のようにインターネット、放送、通信、映画、新聞、出版を統合すべくメディア・コングロマリット（複合企業）化し、コンテンツ産業としてデジタル系メディアに積極的な投資を行うことがない。

また、日本における学術系の電子書籍が成立しない1つの要因として、出版社にとって図書館が市場として正当に評価されていないという問題もある。

しかし、これからの図書館像を考えると、デジタル化された出版コンテンツの収集・提供・保存は喫緊の課題である。電子書籍として存在しないから収集しないという受身の姿勢から、電子書籍化するように働きかけることも含めて利用者の立場で行動することが重要な仕事になってくるだろう。

出版コンテンツの領域に図書館ではなく、Google、Amazon、Appleといった企業が参入していることが現在のメディアの状況を象徴している。Google「ブック検索」著作権訴訟和解案¹⁰⁾を見ればわかるように、Googleは人類が生み出してきたあらゆる書物をデジタル化し、巨大なデータベースを構築し、全文検索サービスを利用者に提供しつつある。また、Amazonはデータ通信機能を内蔵した読書専用端末「Kindle」を発売し、書店店頭に並んでいるような新刊書籍を電子書籍として廉価に販売するしくみを米国において作り上げている。さらにAppleはタブレット型コンピュータ「iPad」を全世界で発売し、「iBookストア」で電子書籍をダウンロードして電子書籍アプリケーション「iBook」で読むという音楽配信と同様のビジネスモデルを構築しようとしている。

このような時代状況の中で、従来の紙媒体の本や雑誌を書架に並べ閲覧・貸出に供しているだけでは図書館は“正倉院”となってしまうだろう。医学系図書館であれば“医学系情報の利

用者への提供は図書館こそプロ”といえる図書館作りが必要なのである。

V. おわりに

冒頭に述べた医科大学生は他大学の医学系図書館の実態を知りたいとのことだったので、私は大学図書館の医学分館の知人に連絡を取り、この学生を紹介しようと趣旨を説明した。すると知人からは次のような返信があった。

「偶然なのですが、本日、医学部の3年生に文献講習会を開いていて、その際1人の学生から、『今日の診療（イントラネット版）』をよく使っていて便利なので、和書の電子ブックを増やしてほしいと購入希望を出してもいいですか、と尋ねられました。利用が集中するシラバスに掲載された定番の参考資料などは複本をたくさん購入するよりも、シラバスから直接リンクをはって、電子ブックが利用できれば学生も利用しやすいし、図書館のスペース節約にもなります。」

電子書籍における和書コンテンツの充実と電子書籍を導入する図書館の増加は、ニワトリとタマゴの関係のように相関し合っているのであるが、利用者にとって何が大事かという視点に立てば、医学図書館においても電子書籍がOPACからシームレスに利用できることが望ましいだろう。

一旦この便利さを経験した医科大学生はその後、自ら電子書籍の導入推進を図ろうと医師会や国会議員に働きかけるという具体的な行動を始めて私を驚かせている。図書館がこのような利用者の声に耳を傾ける必要があることはいうまでもない。

参考文献

- 1) 国立国会図書館. 電子書籍の流通・利用・保存に関する調査研究 PDF 版. [引用 2010-02-10]. http://current.ndl.go.jp/files/report/no11/lis_rr_11_rev_20090313.pdf
- 2) 電子書籍ビジネス調査報告書 2009. 東京：インプレス R&D；2009. p. 11-2.

- 3) エルゼビアジャパン. ScienceDirect 電子ブック概要. [引用: 2010-02-10]
<http://japan.elsevier.com/products/sd/books.html>
- 4) 京都大学図書館. 電子リソース. [引用 2010-02-09].
<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/gakunaieb.html>
- 5) 電子書籍の流通・利用・保存に関する調査研究. 東京: 国立国会図書館: 2009. p. 253.
- 6) 丸善・日本化学会. 化学書資料館. [引用 2010-02-10]. <https://www.chem-reference.com/>
- 7) 医学書院. MedicalFiner. [引用: 2010-02-10].
<http://medicalfinder.jp/ejournal/>
- 8) 医学書院. 書籍・電子メディア. [引用 2010-02-10]. <http://www.igaku-shoin.co.jp/bookTop.do>
- 9) トーハン. Medical e-hon. [引用 2010-02-10].
<http://www.me-hon.ne.jp/meb/>
- 10) グーグル. Google ブック 検索和解契約. [引用 2010-02-10].
<http://books.google.com/intl/ja/googlebooks/agreement/>